

第一日曜日  
教会学校 9:00～  
主日第一礼拝 9:00～  
主日第二礼拝 10:30～  
その他の日曜日  
教会学校 9:00～  
聖書を読む会 9:00～  
主日礼拝 10:30～

# 日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2019 (令和1年) 8. 11

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276  
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

祈祷会  
第2日曜日 礼拝後  
成人会  
第3日曜日 礼拝後  
婦人会  
第4日曜日 礼拝後  
教会附属 南部坂幼稚園

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

## 「約束を必ず果たされる神」

牧師 松谷 祐二

### 創世記 第一章二～二二節

日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。主はアブラムに言われた。「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫はこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、カイン人、ケナズ人、カドモ二人、ヘト人、ペリジ人、レファイム人、アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の土地を与える。」

### 出エジプト記 第六章二～九節

神はモーセに仰せになった。「わたしは主である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。わたしはまた、彼らと契約を立て、彼らが寄留していた寄留地であるカナン土地を与える約束をした。わたしはまた、エジプト人の奴隷となつてイスラエルの人々のうめき声を聞き、わたしの契約を思い起こした。それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う。そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる。あなたたちはこ

うして、わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちをエジプトの重労働の下から導き出すことを知る。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると手を上げて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として与える。わたしは主である。」モーセは、そのとおりイスラエルの人々に語ったが、彼らは厳しい重労働のため意欲を失って、モーセの言うことを聞くとはしなかった。  
(新共同訳聖書)

神はこの世界と人間を、非常に良いものとして創造され、祝福された。しかし、人間は神を疑い、自分の欲するままに生きることを選んだ。その結果、初めの良さは損なわれ、人間も世界も、今日のように混乱し、傷ついた姿を呈している。しかし、神はそれでもなおこの世界と人間を愛され、ご自分のもとに帰らせようと、救いの手を伸ばされた。

旧約、新約聖書全体の世界観は、例えばこんな風にまとめることができるのではないかと思います。新約聖書では、その神の救いの手が、イエス・キリストの誕生、その働き、その十字架の死、復活、昇天といった出来事を通して、直接的に、完全な形であらわにされます。旧約聖書の内容はイエス・キリスト以前の事柄ですが、わたしたちにとって何が救いになるのか、なぜ最終的にイエス・キリストが救い主として来られることが必要なのか、その道筋を明らかにしています。そして、旧約でも新約でも神は同じ神ですから、わたしたち人間を救おうとされる一貫した神の思いが、旧約聖書における様々な出来事を通して、また、分かるようになっていきます。

旧約聖書では、神はアブラハムとその子孫を選び出し、「約束の地」カナンに住ませ、そこで神の民として幸いに生きるように導こうとされています。全世界の民に、この神の祝福のもとに生きることに幸いが伝わり、すべての人がやがて神のもとに来て、同じ祝福にあずかるためです。

神は、強い先住民のいる土地を、アブラハムとその子孫に与える約束をされています。しかし、これを現代のイスラエル・パレスチナの領土問題につながるものとして読むことはお勧めできません。

ん。「約束の地」に入ること、住まうこととは、ずっと後にイエス・キリストが熱心に説き聞かせることになる。「神の国」に入ること、神の救いにあずかること、を、旧約聖書的に表現したものとしてみたいと思います。

同様に、「イスラエルの人々はエジプトで奴隷として苦しめられた」とあるからといって、出エジプト記は現代のエジプトやエジプト人の良し悪しを語っているわけではない。神がわたしたちを、奴隷の状態から神の国へ導き出そうとされている、ということ語っているのです。わたしは人間は、わたしたち自身の「罪」の奴隷です。「神に聞き従って」ではなく、「自分の欲するままに」という、一見、そう悪くもなさそうに思える生き方から、わたしたちは離れられません。自分の欲するままに生きたいと、ただそのために、わたしたちは心血を注ぐ。実はまさにそこから、出エジプト記におけるファラオの支配のように、自分の欲望のために他を犠牲にする社会、国、世界のシステムが構築されていくのです。出エジプト記の少なくとも冒頭では、イスラエルの人々は「犠牲者」です。しかし彼らもまた、奴隷であることに慣れてしまっています。モーセが遣わされて、神の救いの言葉を伝えても、彼らは重労働のため意欲を失って、その言うことを聞こうとはしませんでした。エジプトを脱出した後になると、いよいよはつきりとモーセに反抗し、「エジプト人の奴隷でいた方がましだった」と、何度も不平を鳴らします。罪の奴隷であるわたしたちが、自力で罪から抜け出すことは不可能なのです。

しかし神は、ご自分の責任において言われました。「わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う」と。四百年もの昔にアブラハムに誓った通りにしよう、と固く決意していらつしやるのです。その約束を今こそ果たすため、モーセをファラオのもとにお遣わしになった神。この神が、わたしたちのために、イエス・キリストをお遣わしになったのです。わたしたちを奴隷の身分から救い出し、ご自分のもとに帰らせ、神の国に迎え入れるために。

### 座標軸

松谷佳子

今年の梅雨は長かったような気がしますが、日照時間が少なくて、どんよりした肌寒い日々に、辟易してしまうこともありましたが、でも、ものは見よう、見方を変えると、悲観的に思いがちなものも、肯定的に捉えられるようになるのが面白いものです。犬を飼っているものとしては、曇りの梅雨空はありがたい、朝寝坊で散歩時間が、多少遅くなっても、なんとか行けるからです。これが、夏の炎天下では、どうでしょう。アスファルトが熱くなって犬は脚を火傷してしまうでしょう、汗のかけない犬は熱中症になってしまおうでしょう、そんなことを考えたら心配で散歩など行けなくなるでしょう、とにかく散歩に出ても出なくても、犬は悲しい顔で飼い主を見上げる始末です。それだけでも、憂鬱だった梅雨は有難いものに変わるのです。

人はものの見方を変えることができる唯一の生き物？なのですから、それが上手にできれば、何と幸せなことだろうと思うのです。なかなか、そんなに器用にできるものはないですが。

どんなことでも、一つの考え方に、捉われてしまわないように、柔軟でいたいものだと思えます。

私が最近、意識して気をつけていることは、自分が一番良い方法(良い考え方)だと思っていることも、一旦脇に置いて、違うものを取り入れてみようとする事です。握りしめていたものを、ゆるめる作業は、頭の硬い私にとっては、はつきりいつて苦しいと感じることがありますし、すぐのできるものではありませんが、最終的に

は悪くないものです。

話がかなり飛躍しますが、ものの見方といえは、イエス・キリストを知らなかったひとが、自分の座標の中心にイエス・キリストを据えるとどんな風にものごとがかわって見えるのでしょうか。

時々聞くには、ものすごい変化があるようです。ある種の感動、衝撃のようなもの、人生が変わるようなものだそうです。

聖書に出てくるパウロは、そのような体験をした一人でしょう。パウロは、現代でいうならば、東京大学の法学部を首席で卒業したというような、優秀な人でした。もし私のように想像に乏しい人でも、パウロはそれを沢山語って、記録しているので、聖書を読めばその興奮が伝わってくるのだらうと思えます。

キリスト教徒を迫害していたパウロが、キリスト教を布教するために命をかけるという人生に方向転換することになったのですから、ものすごい衝撃だったでしょう、いや衝撃だったのです。

他人からみれば、パウロは座標が変わったことで、しなくてもよかったような苦勞ばかりの人生を送ったようにみえたかもしれませんが、パウロは全く違う感じ方をしています。絶望的な中でも希望を見出し、イエス・キリストに導かれて行くのですから。日本では、世の中に絶望して自暴自棄になる人が多いように思えます。ここ何十年も戦争がなく平和だったと言われているのに。

絶望せず、希望を持つということとは、何を根拠にできるのでしょうか。

自分を信じるという言葉をよく耳にしますが、私にはとうてい無理な話です、自分を座標の中心に据えるのは、あまりにも心もとなく危なっかしいからです。では何を座標の真ん中に持つてくるのでしょうか。

イエス・キリストを自分の座標の中心に据えると、ものの見方がどんな風にかわるのか、どんなよいものが見えるのか。ちょっと想像してみませんか。

### 報告

\* 南部坂幼稚園では、七月十一日(木)の終園式、十一日(木)〜十二日(金)の年長お泊まり会で、一学期が終わり、夏休みに入りました。

\* 七月二十八日(日)〜八月二十五日(日)までは、毎週、主日第一礼拝(九時〜)、主日第二礼拝(十時半〜)を行います。教会学校は、主日第一礼拝に合流します。  
\* 受洗、信仰告白、伝道者としての献身をお考えの方は、牧師までご相談ください。

### 《各部報告 七月度》

#### 成人会

日時 七月二十一日 午後一時より三時  
場所 教会会議室  
出席者 五名  
担当・開会祈祷 佐藤忠昭兄  
内容 前回に引続き創世記五章から  
・ノアの洪水の話は何を聖書は伝えようとしているか  
・箱舟の意味は教会洗礼であるか  
・ノアと神との契約  
・このようなりセツトは終末に現れるか  
・バベルの塔の話で神がとられた対策とペリテオステの子見について、松谷牧師の注釈を受けて勉強した。  
次回から、このノアの子孫であるアブラハムの生涯が始まる。  
次回 担当 木村信太郎兄 十二章から

閉会祈祷 主の祈り

#### 婦人会

日時 七月二十八日 主日礼拝後  
場所 教会堂会議室  
出席者 六名  
閉会祈祷 菊池才知子姉  
閉会祈祷 各自順次小祈禱  
内容  
一、聖書研究「サムエル記上二十五、十六章十五章 イスラエルの指導者がサウルからダビデに交代する時代の序章。サウル王は兵士たちの欲望に配慮して神の言葉に背き、アマレク人を討った時滅ぼし尽くさなかった。神の言葉に背いた行動をサムエルに詰問されたサウルは自分の行いを兵士たちのせいにして言訳をした。神はサウルをイスラエルの王として立てたことを悔いられた。

十六章 神はサムエルに言われた。「ベツレヘムのエッサイの息子たちの中に王となるべき者を見出した、そこへ遣わそう」。サムエルはエッサイに羊の番をしていた末子を連れてくるように言った。その子が来ると、主はサムエルに言われた。「彼に油をそそぐように、彼がそのひとだ」その日以来、主の霊が激しくダビデに下るようになった。主の霊はサウルから離れ、悪霊が彼をさいなむようになった。サウルの家臣は堅琴を演奏する者としてベツレヘムのエッサイの息子を推薦した。こうして、ダビデはサウルに仕えることになった。  
次回 九月二十二日  
「サムエル記 上二十七章〜十八章まで  
二、教会堂所清掃の件を協議  
三、会堂清掃に関する件の打合せ